



現在の千葉灸入口付近

少し旧聞に属するが、昨年ある雑誌に「千葉灸」という題で司馬遼太郎氏が随筆風のものを書いている。
読んでいるうちに面白くなり早速史談会の方へ、龍馬が師と仰いだ千葉定(貞)吉という人がいる。千葉周作の弟で桶町に道場があったので桶町千葉と呼ばれた。定吉には娘

され候間、則ち差し越し申候。此の趣き先々相触れ、人馬急度用意せしめ相待ち、滞りなきよう致さるべく候。以上
子(同前)二月五日
御伝馬役 馬込勘解由
千住宿より上総国東金町まで
問屋中
前書(最初の文書)御触書拜見承知し畏まり奉り候。且つ御本紙の儀は墨付き汚れ等これなため油紙に相封じ、御文書は御請印帳前書に写しとり、先宿村々拜見の上御請印形なされべく候。若し御本紙拜見なされなき宿村は、墨付き汚れこれなく候間、開封の上大切に取扱い、拜見相済候はば元の如く相封じ、その段添書致し早々順達留りよ宿継を以て当宿(千住宿)へ御返しなされべく候。以上。

子(同前)二月五日

千住宿問屋 雄三郎 印
年寄 長右衛門 印

宛名は④の文書と同じ
以上、幕史及び御朱印が上総国東金町(現在は市)まで通行したのは、元治元年(一八六四)一月に現在の千葉県山武郡九十九里町に、真忠組と称する浪士の一団が、尊王攘夷を唱えて暴挙を図ったのを、幕府は佐倉、多古、一之宮の各藩及び関東取締出役に命じてこれを鎮定した。その後処理のため幕府から多くの吏員を派遣してそれに当らしめたのである。私はこの真忠組事件を取りあげ、近く「真忠組浪士騒動実録」を上梓することになってゐる。

千住仲町二十九番地

丸山 宏

があり、さな子といった。さな子は道場の塾頭をつとめる竜馬を意中の人にきめ、彼が江戸を去る日にその胸中を打ちあけたが、竜馬にはその時すでにおり、ようという妻があったので、さな子の申し出を婉曲にことわり、彼の着ていた着物の片袖をあたえて江戸を発つ

たのである。
以上はテレビ等でおおかたご承知のことと思うが、そのさな子が千住に住んでいたという話である。正確には千住仲町二十九番地であったと氏は書いている。千葉家には剣の道の外に家伝の灸があり、維新後剣がはやらなくなつてから桶町千葉家の生業になり、さな子も千住で灸点をおろしていたとのことである。現在もこの場所に五代目の千葉晃氏がお住いになり灸治院を経営されている。それが千葉の灸である。
氏の小説の中で生きている古風なさな子に当時の日本女性の姿を見ることが出来る。竜馬の片袖を守り一生他に嫁がず、竜馬の妻として千住掃部宿の一隅にひっそり暮らしていたのであろう。
生存中は無名であったが、昭和の御代になつて突然、竜馬と共に司馬氏の筆により有名になつた彼女が、わが足立区に関係があつたということとは非常に興味深かつたので書いてみた次第である。

郷土資料室からお願い

中央図書館郷土資料室では、「足立のまつり」に引き続き、第五回展「足立の交通」を五月から開きたいと計画しています。乗り物関係(かご・馬具・舟)、旅行関係(旅じたく、宿屋、通中手形、日記など)、駅通関係(駅令、運賃表)その他「渡し」や「道しるべ」など、交通関係の資料集めを行なっています。みなさん方の中で、関係史料、道具類または写真などお持ちの方がありませんかご協力を。電話840-1464六羽田

舊考録

教育委員会

(白)

(第十五号より続く)

雛鶴の巢に高砂の松の月

養目庵 三道

永野とはうべもいひけりむかしより世々につぎせぬ家の名なれば

里の名の千寿をおのがよはひにていへも永野のすゑさかゆらん

永野とハうべもいひけり代々へたるところも千寿万歳の家

いかばかり永野なるらん千代よろづよくゆきぬともかきりしられず

辞世

波の岸へいたるはうれし永野の代のゆめの浮橋わたりつくして

永野世のゆめ覚て後かぎりなきにしの浄土に行ぞうれしき

永野政重稿

家隔荒川住北涯星霜數百閏年□永看瓜□
延□野不等春風輕薄花

(訓み、家は荒川を隔てて北涯に住す。星霜數百、年をへることはかなり、永く看るかてつ瓜類の野に延することを。春風輕薄の花に等しからず)

静軒 寺門 良